九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

J.M.エリスのグリム批判とその問題点 : グリム童話(KHM)研究の解釈学的,教育学的視点

岡本, 英明
九州大学大学院人間環境学研究科国際教育環境学講座 : 教授 : 教育人間学

https://doi.org/10.15017/967

出版情報：大学院教育学研究紀要. 2, pp.93-112, 2000-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，1999，第2号(通巻第45集)，93－112
Res. Bull. Education., Kyushu U., 1999, Vol.2, 93－112

J. M. エリスのグリム批判とその問題点

――グリム童話（KHM）研究の解釈学的，教育学的視点――

岡　本　英　明

I

過去20年来，メルヘン，特にグリム兄弟（Brüder Grimm）の『グリム童話』（初版1812/1815年，第七版1857年）正確には『グリム兄弟によって収集された，子どもと家庭のメルヘン集』（"Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm"，以下KHMと略記）への新しい関心が本国ドイツのみならずアメリカや我が国でも顕著に見られ，一種のメルヘン・ルネサンスの観を呈している。その原因は，KHM自体の魅力，健やかな子ども時代への憧憬などにあるのみならず，精神的転換，失われた価値への追憶，アルカイックなコミュニケーション形式（物語る，歌う）への志向などを特徴とする現代のポストモダン的な社会潮流にも求められよう[1]。

しかし，こうした折りも折り，カリフォルニア大学ドイツ文学科教授のジョン・M・エリス（John Martin Ellis）は1983年に刊行した問題の書『一つよけいなおとぎ話』（"One Fairy Story too Many"）[2]において，グリム兄弟のKHMに対して極めて辛辣な文献学的批判を展開することによって彼らを「告発」して，グリム兄弟は彼らのメルヘン収集の成立について読者たちを意識的に欺いたのであり，「KHMのメルヘン集は魅力的かつ興味深い200話を提供している。しかし今ではもう確かに，兄弟がこのメルヘン集を世に送り出す際に付け足したあのおとぎ話を廃止すべきである。― それは要するに一つ余計なおとぎ話なのだ（it is altogether one too many.）」[3]とグリム兄弟を非難している。（この書の邦訳，池田香代子・薩摩竜郎訳『一つよけいなおとぎ話 グリム神話の解体』は1993年に新曜社から出版されたが，ドイツ語訳は未だに出ていない。）

このエリスの非難は，主として次の五点[4]に要約されよう。

①グリム兄弟が使った素材を提供した人々は，土着の口頭伝統を伝承する，年老いた素朴で無学なドイツの農民ではなく，その代わりに教養の深い中流階級で，主におそらく口頭伝統よりも書物から一層より多く影響を受けた若い人たちであった。― そしてその中には，フランス系の人たちか，または実際にフランス語を話す人たちという大変重要な存在を含んでいた。

②話の提供者について知られている事実によれば，彼らは大部分グリム兄弟の家族や友人やホーム・エリアの知人たちに限られていた。このことは，収集の土台が非常に狭いことと共に，兄弟が収集にほとんど関心を払わなかったことを示している。

③グリム兄弟は，自分たち自身は全くの偽りと知りながら，彼らの素材が古代の民衆に起源を持つ

という印象を与えるために，事実を隠したり，あるいは偽って述べることによって，故意に読者を騙した。

④これら最初の三つの結論がすべて真実であることを示すのに絶対必要な事実は，とうの昔から手に入れることが出来た。

⑤研究者たちは，この証拠が①と②の結論を導くことを認めるのに少なからぬ抵抗を示したし，ましてや，それが③の結論を導かなければならないことを認めるのには完全に全面的に抵抗を示した。「最も豊かな知識を持つグリム研究の専門家たちは，子どもたちがグリム兄弟のメルヘンに魅せられ，欺かれて来たのに負けず劣らず，メルヘン集の起源についての兄弟によるおとぎ話に魅せられ，欺かれて来たかのようだ。」(5)

エリスによって為されたこの一見厳密な研究を読むと，ザイプス（J.Zipes）が1985年の書評「針小棒大，一つのおとぎ話」（"Mountains out of Mole Hills, a Fairy Tale"）で述べているように，グリム兄弟とグリム研究者たちへのエリスの告発ないしは言い掛かりに加担して，彼らの「罪」を罰したくなるようにほとんど強要されそうになる。しかし，ザイプスによれば「より詳細に吟味してみれば，エリス自身に不正行為の罪を負わせることが出来ることは明らかだ」(6)という。

また，レレケ（H.Rölleke）はザイプスの書評より一年前の1984年に発表した書評において次のように述べている。「あらかじめそして直ちに全く明瞭に言えば，参考文献をよく読んでいる才気ある著者の著書であるにもかかわらず，この研究は全体として紛れも無く失敗である。（中略）『証拠』（"Beweise"）は彼によって好き勝手に選ばれており，大抵は連関から引き離されて（KHM の序文！）一般化した解釈において仕上げられている。（中略）広範な探索と投資された鋭敏さが，かくもこじつけの，そして（私はどうしても言わなければならないが）歪んだ帰結に至ったことと，思うにこの帰結が残念ながら英語圏の読者の一部で共通意見（opinio communis）になるかも知れないことは，非常に遺憾であると言わなければならない。— プロウアー（S.S.Prawer）は既にこの意味で感激して *The Times* の中で意見を述べたのである。」(7)

このプロウアーの書評は，実は The Times の中ではなく，その姉妹紙の TLS（The Times Literary Supplement）の中で発表されたのであるが，その最終部でプロウアーは次のように述べている。「グリム兄弟の手品についてのエリス教授の論証を是非とも心に留めようではないか。— 実際いかなる研究者もこの論証を無視することは出来ない。しかしまた，グリム兄弟が世に送り出したこの芸術的作品を享受することを続けようではないか。そして，その出処や資格についてあまりに多く，あるいはあまりに絶え間無く心配するのはよそうではないか。」(8)

このようにプロウアーは，エリスが彼の「訴訟」を立証したことに同意せざるを得ないと言うのであるが，果たしてそれで正しいのであろうか。本稿では以下において，エリスの立論のそれぞれを詳細に吟味してその問題点を検討すると共に，最後に KHM の解釈学的，教育学的考察を試みてみたい。

II

まず，エリスの KHM 批判を全体的に概観すれば，レレケ，ザイプス，ウーター（H.-J.Uther）の各書評が期せずして異口同音に述べているように，エリスによって発見されたという広範な事実には何一つとして新しいものやオリジナルなものはない。ウーターによれば，「それはむしろ，近年ヨーロッパにおいて（そして特にドイツ語圏で）議論されたテクスト問題と伝承問題（その際に大きな功績はヴッパータール大学のゲルマニストのレレケに帰せられる）の受け売りである」[9]。

グリム兄弟が使った素材の提供者たちに関しては，「ドロテア・フィーマン（Dorothea Viehmann）を唯一の例外として，グリム兄弟は KHM のどの版でも，話の提供者に関する情報をほとんど全く与えなかった。名前も日付けも挙げず，せいぜいテクストの出処の地名を提示しただけだった。土地を名指せば民衆的な雰囲気が醸し出され，そのメルヘンはドイツ国土の特定の地域に源を発するのだと匂わすことになる。それ以外には，話の提供者の年齢，読み書きの能力，階級，国籍を伺わせる如何なる情報も伏せられている」[10]という事実から，エリスは次のような四つの結論を引き出している。

すなわち第一に，メルヘンの提供者たちは実際にはみな中流階級の人たちであったが，それを公表するとメルヘンが民衆起源であるとするグリム兄弟の見解を脅かすことになるので，階級を伏せた。第二に，グリム兄弟が実際には専ら身近な友人やその家族から話を集めただけだったという事実を認めれば，学問的良心の極めて乏しい怠慢が露呈して，グリム兄弟にとって何ともばつの悪いことになるので，話の提供者の名前を伏せた。第三に，数の上（全体のほぼ1/3を占める）でも内容的にもグリム兄弟のメルヘン集を代表する話の提供者であるハッセンプフルーク（Hassenpflug）家が実はユグノー出身でフランス系であったことは，メルヘン集が典型的にドイツ的性格を持つとするグリム兄弟の見解を危うくすることになるので，話の国籍を伏せた。第四に，話の提供者は実は主に若い人たち ― ヴィルト（Wild）家やハッセンプフルーク家の教養ある娘たち ― であったので，それではフィーマン（グリム兄弟に約40のメルヘンを提供した）のような土着の農婦（グリム兄弟はそう信じていたが，実はフィーマンもフランス系移民の子孫であったことがレレケの研究で明らかになった）が古代のメルヘンを語るといったグリム兄弟の理想のタイプにそぐわないので，話の提供者の年齢を伏せた[11]。

以上のようなエリスの結論に対して，次の各点を指摘しなくてはならない。すなわち，

1．エリスは，話の提供者はみな中流階級の人たちで純粋にインテリ層のメルヘンを提供したと言うが，レレケが述べているように，彼らはまた当然，以前には小市民や農民階級の間に伝承された話をもグリム兄弟に提供したであろう。「ヴェストファーレン地方の話の提供者であるハクストハウゼン（Haxthausen）家やドロステ＝ヒュルスホフ（Droste-Hülshoff）家の人たちは，低ドイツ語の方言で語られた数多くの話をどこから手に入れたのであろうか? 証明されているように，大部分は彼らの農場で村の住民や作男や下働きの女たちから聞いたのである。」[12]

さらにエリスは，インテリ層ではない提供者たち，例えば18世紀以来ドイツでは急速に消滅した男性メルヘンの伝統を伝える「用意周到さん」（KHM 初版第 1 巻 16, KHM 62A），「ナプキンと背嚢と

大砲帽子と角笛」(KHM 初版第1巻 37),「老ズルタン」(KHM 初版第1巻 48, KHM 48K),「黄金山の王様」(KHM 初版第2巻 6, KHM 92),「名人かりゅうど」(KHM 111A),「三枚の蛇の葉」(KHM 第二版 16K, KHM 16K),「背嚢と帽子と角笛」(KHM 第二版 54 [KHM 初版第1巻 37の類話], KHM 54) [A=1856年のグリムの注釈本(註24に記載の3巻本の Bd.3)の中の註(Anmerkung), K=他の類話との混交(Kontamination)] ([ ] は本稿筆者の説明)など合計6話ないし7話を提供した退役竜騎兵曹長クラウゼ(J.F.Krause)[13],「灰かぶり」(KHM 初版第1巻 21, KHM 21K),「金の鳥の話」(KHM 57)の2話を提供した「マールブルクのメルヘンお婆さん」,「三羽の小鳥」(KHM 96)を提供したケーターベルクの羊飼い,「ガラス瓶の中の精霊」(KHM 99)を提供したベーケンドルフの仕立て屋,「寿命」(KHM 176)を提供したツヴェールンの農夫,「太鼓叩き」(KHM 193)[14]を提供したアイヒスフェルトのくず屋シュテッフェン(Steffen)などに意図的にか全く言及せず,こうした事実を完全に無視している。

クラウゼについては,プロウアーも同様に次のように指摘している。「彼[エリス]はドロテア・フィーマンの『無学な下層階級者』の身分と『老女マリー』("die alte Marie")を適切に粉砕したが[しかしこの粉砕もレレケの発見[15]の受け売りに過ぎないことに,プロウアーは気づいていない],NCO(退役下士官)のクラウゼについて全く何も述べていない。このクラウゼから,メルヘン集の最も生き生きとした兵隊の話が由来しており,彼のインテリではない下層階級の身分は,1823年7月26日付けの発音どおりに綴られた手紙に感動的に露呈している。この手紙の中でクラウゼは,彼の恩人であるグリム兄弟に,使い古しのズボンを譲ってくれるように頼んでいる。」[16]

2.グリム兄弟が話の提供者の名前や年齢や話の国籍を伏せたのは,エリスが邪推するような理由からではない。グリム兄弟は,収集した数々の匿名の民話ないし民衆メルヘン(Volksmärchen)の中に,彼らが究極的に求めるドイツの神話(Mythologie)が口頭伝承された証左を発見したと確信していたので,それぞれの提供者の名前や話の出処をいちいち挙げる必要を感じなかったのである。ただ弟のヴィルヘルム・グリム(Wilhelm Grimm)は,KHM 初版の著者保存本[17]の中に,話の提供者の名前と話を聞いた年などを,例えばKHM 初版第1巻 11「兄と妹」の末尾に「1811年3月10日にマリーから」("von der Marie 10 März 1811")[18]という具合に,自筆で書き入れている。そうした点でこの著者保存本は,KHM 成立史に関する第一級の原典であり,現在「グリム兄弟博物館 カッセル」("Brüder Grimm-Museum Kassel")の最も重要で貴重な所蔵品となっている(ちなみに,筆者は1999年の夏にカッセルのグリム兄弟博物館を訪れて,この保存本を実見することが出来た)。また,KHM の初版に発表した話の内で,それがあまりにもフランスのペロー(C.Perrault)やオーノワ夫人(Madame d'Aulnoy)に依存していることが判明した話(「長靴をはいた猫」,「青ひげ」,「ネズミ皮の王女」,「オーケルロ」)などは,グリム兄弟によって第二版(1819年)以後は削除されている。

3.ドロテア・フィーマンの提供した話のすべてがフランス系だとするエリスの断定は間違っている。彼はフィーマンが提供した合計約40の話を無謀にもペローの13のテクストに連れ戻そうとするが,レレケの調査によれば「事実そのレパートリーの約1/3は直接的,間接的にフランスの影響を示している。— 残りの2/3の話は,彼女が少女のころ父親の営む宿屋クナルヒュッテ(Knallhütte [雷鳴館]

）で，何でも知りたがる宿屋の娘として，そこで宿泊する車力たちや従業員たちの会話から体得したと思われる」[19]という。さらに，レレケは1987年の論文[20]の中でフィーマンの家系図を示して，かの文豪ゲーテ（J.W.v.Goethe）はドロテア・フィーマンの母方の５親等のいとこに当たり，彼女の母親はドイツ人であり，したがって彼女にとって，母の話す語と母国語という二重の意味で，母語（Muttersprache）はドイツ語であったことを解明している。「フィーマンのレパートリーの80％はクナルヒュッテから，つまりヘッセンの近郊から由来している。何故ならば，その他のグリム童話とは全く反対に，彼女の話の約80％は男性が主人公だからである。」[21]

Ⅲ

次に，エリスのもう一つの重要な批判点は，グリム兄弟の原拠素材と刊行テクストとの関係，つまりKHMのテクストの改訂ないし改作に関する問題である。

「第一に，原拠素材は完全に作り替えられ，書き直され，大幅な改筆を受け，その結果として，通例，長さが二倍になっている。第二に，オリジナルの文体と味わいはその過程で完全に破壊され，結果として生まれた文章の調子は兄弟自身の創作となった。第三に，オリジナルの語り手の『語り口』（“voice”）はこの過程で跡形もなく消し去られている。第四に，追加された素材によってメルヘンの内容には沢山の新たな要素が付け加えられ，それは通例，メルヘンのプロット，主題，性格，動機づけに重要な変化をもたらしている。」[22]

しかし，ここでエリスは明らかに現代の記述民族学の立場に立って非歴史的ないし時代錯誤的にテクストの改作を不正直で非学問的だと非難している。既に1932年にK.シュミット（K.Schmidt）は次のことを注意している。「現今の時代は民間伝承の記録について，より厳密に考えており，グリムの見解（すなわちヴィルヘルムの）をまさに変造と見なし得るであろう。しかしながら，グリムの時代にとっては，それは学問的見解における重要な前進的一歩を意味していた。ムゼーウス（Musäus），ブレンターノ（Brentano），アルニム（Arnim），ゲレス（Görres）を一瞥すれば分かるように，それ［グリム兄弟の見解］はまさに当時は総じて新しかったのである。それが初めて，次第に深く影響して，メルヘンを救出することを教えたのであった。」[23]

同様にレレケは1980年に，「ドイツの民間噺の厳密な学問的，民族学的な採用と再現に対しては，19世紀の初頭は如何なる出版社も，またとりわけ如何なる読者も見つからなかったであろう。― 彼ら［グリム兄弟］の中世研究や，より学問的に行われた1816/18年の伝説集［『ドイツ伝説集』（“Deutsche Sagen”, 2 Bde.）］の際でさえ，グリム兄弟は［読者たちの］一致した無関心を痛切に経験しなければならなかった」[24]と述べている。

また，レレケは上述した1984年の書評の中で，「エリスはグリム兄弟に対してアポステリオーリにメルヘン研究（誰の？）の名において，彼らに提供されたテクストへのあらゆる変更を不誠実あるいは非学問的として恨みたいのだ。― しかしこれは，最後の仕上げをする改訂者は，彼がその話を読者（そして勿論第一に出版者）に提供し得る以前に，その話を場合によっては類似の典拠から補足した

りして，とにかくきちんと物語る権利を持っている（ゲーテ）という，当時未だ長らく自明的に支配していた見解と対立している。— さもなければ，そうした話を救出しようとする改訂者の試みはむしろ反対の影響を及ぼすことになろう」[25]と述べ，さらに次のようにエリスを皮肉っている。「グリム兄弟が，しばしば断片的で，時には自己矛盾していて，絶えず言語的に不完全ないし古臭くなって（文献上の典拠）彼らに届いた覚書を録音テープ的ないし逐字的に忠実に翻刻したとすれば（ところで彼らは可能な限りこれをまた実行した。例えば，ユング＝シュティリング（J.H.Jung-Stilling）［の自伝的小説（1777-1817年）から］の受け入れ［KHM 69「ヨリンデとヨリンデル」，78「お祖父さんと孫」，150「乞食のお婆さん」］[26]を比較されたい），誰もそれを相手にしなかったであろうし，またエリスが1983年に彼の筆になる214頁をそれに捧げることもなかったであろう。」[27]

ザイプスもまた上述した1985年の書評において，類似の見解を述べている。「エリスは，KHM がグリム兄弟の民族学研究における最初のメジャーな尽力であり，彼らがこの分野でのパイオニアの一員であることに全く言及していない。（中略）グリム兄弟にとっては，ドイツ精神（*Geist*）への適切な表現を与えることが，彼らの作品にとって絶対に必要であった。そして彼らは，たとえ彼らが中流階級の話し手にすがったとしても，自分たちが歪曲者であると思ったのではなく，むしろ民衆の間に根付いたドイツの文化伝統の解釈者であると思ったのである。」[28]

Ⅳ

KHM の諸版の序文，特に初版の序文で「兄弟が自分たちは何も変えたり改善したりしなかったし，自分たちのものは何も付け加えなかったと主張したとき，兄弟は明らかに意識して嘘をついていたのだ」[29]と，エリスはグリム兄弟を断罪している。

確かに，KHM 初版第１巻（1812年）の序文を書いた弟のヴィルヘルム[30]は，その序文で極めて誤解を受けやすい次のような表現をしている。「我々は，これらのメルヘンを出来るだけ純粋な形で理解しようと努めた。（中略）如何なる状況も書き加えたり，美化したり，削除もしなかった。というのも，それ自体でかくも豊かな話を，アナロジーや類推で長くしないように努めたからである。メルヘンは作り出すことが出来ない。」[31]さらに第二版（1819年）の序文では，次のように書かれている。「ここでの収集の方法に関しては，まず第一に忠実さと真実性（Treue und Wahrheit）が我々には重要であった。つまり，我々は何一つとして勝手に付け加えることはしなかったし，言い伝え自体の細部や特徴に潤色することはせず，我々が聞いたとおりにその内容を再現した。個々の表現や敷衍は大部分我々に発するのは言うまでもないことだが，我々が気づいた特質はすべて残して置くようにした。」[32]

しかし実際には，1810年の KHM 租稿［エーレンベルク手稿（Ölenberger Handschrift）］から KHM 初版を準備する際に著しいテクスト変更が為されており，さらには初版の出版以後にも版を追うごとにテクストに手を入れて改訂ないし改作されている。したがって，初版の序文自体がメルヘン的とも言えよう。この点について，ザイプスは上述した1985年の書評の中で次のように述べている。「確か

に，こういう言い方を許して貰えるならば，失礼ながらグリム兄弟は初版の中の綱領的声明において『嘘をついた』（“lied”）。（中略）しかし，彼らはその後この声明を撤回して，決してそれを隠蔽しようとはしなかった。エリスは，グリム兄弟が彼らの最初の声明によって苦境に陥ったと思っている。しかしエリスは彼の主張ないし推論的言い掛かりへの証拠を提出していない。反対に，もしもグリム兄弟が彼らの行為をごまかそうとしたら，彼らはその『嘘』（“lies”）を第二版でもっと密かなやり方で包み隠すことを試みたであろう。もっと言えば，彼らは自分たちの手書きの原稿［KHM 租稿］（この原稿は，現今の研究者たちによってグリム兄弟の真正の典拠を示すために利用された）を返却するようにクレメンス・ブレンターノ（Clemens Brentano）に請求したであろう。」[33]

またレレケによれば，「［第二版の］序文においてグリム兄弟は，フィーマンのレパートリーからの『相当数』（“manches”）は『言葉どおり保存されている』と明確に強調した。— このことは明白に，彼女および他の全ての提供者たちのレパートリーからの多くのもの（vieles）は言葉どおりには保存されなかった，という意味である。我々はこのことを全く正確に読んで理解しなければならない」[34]とされる。

さらに，第二版以後のヴィルヘルムの改訂について，ザイプスは1988年の書『グリム兄弟 — 魔法の森から現代の世界へ』（“The Brothers Grimm. From Enchanted Forests to the Modern World”）において，エリスは大部分ヴィルヘルムが行った改訂の大きな理由を考慮していないとし，ヴィルヘルムは1819年版以降メルヘン集は主として子ども向けにすべきだという考えの下に改訂を続けた点を指摘して，次のように述べている。「グリム兄弟が話を文体的に改良するためと，ドイツの読者にもっと適するために，夥しいテクスト変更をしたという彼の実証も確かに正しい。しかし，グリム兄弟が意識的にドイツの読者を騙そうとして，ドイツの過去について嘘をついたとか，後の学者がぐるになってグリム兄弟の『民族主義的』（“nationalist”）意図を隠そうとしたとか言えるような根拠は全くないのだ。大衆を弄んでいる者がいると言うなら，それはエリスに他ならない。彼はハインツ・レレケやその他ドイツの学者の原典研究を大いに参考にしながら，彼らの研究成果を歪めて採り，グリム兄弟は二枚舌だという神話を作り上げている。（中略）エリスのクレームとは反対に，グリム兄弟は話をもっと子どもに適したものにし，彼らの家庭観，民衆の美学に対する彼らのセンス，政治的理想を努めてその中に織り込もうとしていることを，十分に自覚もし，公にもしていた。（中略）彼らはドイツ人の関心と感性に合うように話を『ドイツ風にした』（“germanicized”）のであって，これは彼らの業績であって，決して彼らの『罪』（“crime”）ではない。それに答えて，ドイツの人々はグリム童話集をドイツで二番目に人気のある本にした。この150年間というもの，聖書だけがその売上を上回ったに過ぎない。」[35]

したがってザイプスは1985年の書評において，1984年のレレケの書評と一致して，エリスの批判は要するにグリム兄弟の KHM についての「一つよけいな研究」（“one study too many”）[36]なのだとしている。

V

1810年のKHM租稿［エーレンベルク手稿］からKHM初版を準備する際に著しいテクスト変更がグリム兄弟によって為された事実に関しては，既に上述したシュミットが1932年の著書において徹底的な比較研究をしている。彼は，J.レフツ（J.Lefftz）が1927年に編集したKHM租稿［エーレンベルク手稿］[37]を底本にして，租稿，初版及びそれ以後のすべての版のテクストに掲載されていて，かつテクスト変更が為されている下記の21話[38]—租稿にヤーコプ（Jacob Grimm）が記録した11話，ヴィルヘルムが記録した8話，提供者たちが記録した2話—を選び総譜（スコア）の形にして比較している。

租稿にヤーコプが記録した11話

1. Der Wolf「狼」H 6（I-Ⅶ 5「狼と七匹の子ヤギ」《W》）
2. Zwölf Brüder und das Schwesterchen「十二人の兄弟と妹」H 10（I-Ⅶ 9「十二人の兄弟」《W》）
3. Vom Schneiderlein Däumerling「仕立て屋の親指小僧」H 14（I-Ⅲ 45「仕立て屋の親指小僧の旅」，Ⅳ-Ⅶ 45「親指小僧の旅」《W》）
4. Dümmling「抜け作」H 18（I 64-2，Ⅱ-Ⅶ 62「ミツバチの女王」《W》）
5. Dornröschen「いばら姫」H 19（I-Ⅶ 50《W》）
6. König Drosselbart「ツグミ髭の王様」H 21（I-Ⅶ 52《W》）
7. Goldne Gans「金のガチョウ」H 27（I 64-4，Ⅱ-Ⅶ 64《W》）
8. Die drei Raben「三羽のカラス」H 40（I 25，Ⅱ-Ⅶ 25「七羽のカラス」《W》）
9. Räuberbräutigam「盗賊婿」H 41（I-Ⅶ 40《J》）
10. Schneeweißchen「白雪姫」H 43（I-Ⅶ 53《W》）
11. Die Wassernix「水の精」H 47（I-Ⅶ 79《W》）

租稿にヴィルヘルムが記録した8話

1. Vom Kätzchen und Mäuschen「猫とネズミのこと」H 2（I-Ⅶ 2「猫とネズミの仲間」）
2. Der getreue Gevatter Sperling「忠実な名付け親スズメ」H 4（I 58，Ⅱ-Ⅶ 58「犬とスズメ」）
3. Von dem Strohhälmchen, dem Köhlchen und dem Böhnchen「ワラ，炭，ソラマメのこと」H 5（I-Ⅱ 18「旅に出たワラ，炭，ソラマメ」，Ⅲ-Ⅶ 18「ワラ，炭，ソラマメ」）
4. Das Brüderchen und das Schwesterchen「兄と妹」H 11（I-Ⅶ 15「ヘンゼルとグレーテル」）
5. Die drei Königssöhne「三人の王子」H 17（I 64-3，Ⅱ-Ⅶ 63「三本の羽根」）
6. Die Königstochter und der verzauberte Prinz「王女と魔法をかけられた王子」H 25（I-Ⅶ 1「蛙の王様 または鉄のハインリヒ」）
7. Marienkind「マリアの子」H 34（I-Ⅶ 3）
8. Rumpenstünzchen「ルンペンシュテュンツヒェン」H 42（I-Ⅶ 55「ルンペルシュティルツヒェン」）

租稿に提供者たちが記録した2話

1. Fündling「拾い子」H 26（I-Ⅶ 51「めっけ鳥」《J》）

2. Herr Korbes「コルベスさん」H 51の後（I-Ⅶ 41《W》）

その結果，シュミットは次のような結論を引き出している。

1 a. ヤーコプの租稿においては，ヤーコプの言葉はほとんど木彫品のようであり，すべての現象を彫塑的に輪郭づけて浮き立たせている。そこでは「あらゆる種類の抒情性が欠けている」[39]。

1 b. ヤーコプの本来的なメルヘン収集は1810年の租稿［および初版（1812/1815年）の中の若干数の話］で終わったのであり，その後の諸版のテクストはヴィルヘルムの仕事である。KHM 初版の著者保存本（註17を参照）第1巻（1812年）の見返しの右ページにヴィルヘルムの自筆で，「ヤーコプによって6. 8のメルヘンはフランス語と英語から翻訳された。（中略）／ヤーコプによって12番. 40番（多分）. 51番. 57番が語られた。」という書き込みがあることから明らかなように，ヤーコプが初版第1巻に書いたのは6番「ナイチンゲールとアシナシトカゲ」，8番「ナイフを持った手」，12番「ラプンツェル」，40番「盗賊婿」（多分），51番「めっけ鳥」，57番「金の鳥」の6話に過ぎない。その中で40番は不確実であり，6, 8, 12, 57番は KHM 租稿には無いので，それらがヤーコプの初稿なのか，それとも既にヤーコプによる改作なのかが［この1932年の時点では］全く分からない[40]。したがって，せいぜい51番「めっけ鳥」（“Vom Fundevogel”）が，租稿の26番「拾い子」（“Fündling”）と比較可能であるに過ぎない。後者は不明の提供者の記録したものを牧師の娘フリーデリケ・マンネル（Friederike Mannel）がグリム兄弟に送付したものであり，前者はそれをヤーコプが改作したものである。この両者を比較すると，初版のテクストは租稿のそれよりも巧みであり，全体として調和がとれていて統一的である。「租稿におけるヤーコプの文体が建築様式的（architektonisch）と呼べるとすれば，此処のこのケースではむしろ色彩派的（koloristisch）と呼べるだろう。」[41]この改作は，租稿に比べて一層より文学的であって，文献学的な忠実さが減少している。

2 a. ヴィルヘルムの租稿においては，ヤーコプの租稿とは異なって，スケッチ風なところがほとんどなく，さらには形容詞や付加語や文体的な修飾語句の使用が目につく。

2 b. ヴィルヘルムの初版テクストでは，多様性，完結性，具体性，統一性，詳細化が顕著であって，彼の芸術家的な尽力が読み取れる。「内容的な変更，追加及び拡大化は，文構造の詳細化や拡張と提携している。それは，モチーフの構成を文構造によって支える尽力なのである。」[42]さらなる特徴は，ヤーコプの租稿で用いられた現在形をほとんど例外なく過去形に変換している点である。この「過去形の表現法を好むこともまた再び，ヴィルヘルムの均整のとれた流麗な前進的（progressiv）な叙述への尽力と連関している」[43]。

3．第二版及びそれ以後の諸版のヴィルヘルムのメルヘンでは，彼は素材をますます鍛えて一層より鋭くし，個々の節が一層より大きな均整のとれたものにしている。文を構造化するこのような作業は改変ではなく，補完的作業を意味している。一般に元々のアウトラインは残っているのであって，新しいものが付け加わっただけである。「内容変更についても同様である。それは主に補完的作業である。（中略）モチーフの資料の多様性，円熟性と完結性，及び美的＝倫理的（ästhetisch-ethisch）な根本態度。」[44]

以上のようにシュミットは，グリム兄弟によるテクストの改作や内容変更が補完的作業であって，個々の話の元々のアウトラインやモチーフそれ自体は守られていると結論すると同時に，メルヘンのテクスト作成に関するグリム兄弟の間の基本的相異を綿密な比較研究によって納得的に明らかにしたのである。

しかるに後述するギンシェル（G.Ginschel）は，1963年の論文「ヤーコプ・グリムのメルヘン文体」（"Der Märchenstil Jacob Grimms"）(45)において，ヤーコプがKHM初版刊行以後の1816年に発表した「メルヘン」（"Ein Märchen"）(46)— ヤーコプがバジーレ（G.Basile）の『ペンタメローネ』（『五日物語』）第15話「蛇」（"Lo serpe"）を改作したもの — を詳しく分析して，KHMを改訂する際のヤーコプの態度は弟のヴィルヘルムと全く同じであったという，シュミットとは反対の結論を引き出している。

Ⅵ

テクストの「忠実さと真実性」（"Treue und Wahrheit"）に関するヤーコプのメルヘン理論は，自然文芸（Naturpoesie）と芸術文芸（Kunstpoesie）をめぐる彼とアルニム（A.v.Arnim）との論争として有名な一連の往復書簡において明らかである。その中の1812年12月31日付けのアルニム宛の書簡においてヤーコプは次のように書いている。「問題なのは忠実さ（Treue）である。数学的な忠実さ（mathematische Treue）は全く不可能である。（中略）君が卵を割った場合，どうしても殻に白味（卵白）がくっついて残るのと同様に，君は何も完全に適切には物語ることが出来ない。それは人間的なもの全ての帰結であり，常に別様になっていく仕方（Façon）である。僕にとって正しい忠実さ（rechte Treue）とは，この譬えに従えば，卵の黄身（卵黄）を崩さない（den Dotter nicht zerbrechen）ことであろう。君は僕たちのメルヘン集を疑うのならば，今述べたことを疑ってはならない。何故ならば，それはそうなのだから。あの不可能な忠実さに関しては，他の人間や僕たち自身が大部分を別の言葉でもう一度物語ったかも知れない（**欄外**：つまり僕たちではなく，他の人間もまた一層より良くそしてまさにそのように忠実に物語るだろう）が，しかし決して忠実さが減少することはないだろう。事柄においては，全く何も追加されたり別様に変えられたりしてはいない。」(47)

このヤーコプの重要な言明に関してシュミットは，ヤーコプにおけるメルヘンの「忠実さと真実性」を，「卵の黄身（卵黄）を崩さない」つまり文体は変更してもテクストの中身である内容を改作してはならないという学問的厳しさの意味に解し，そこから次のような推論を導き出している。「彼［ヤーコプ］が［初版以後］メルヘンの編集から撤退したという事実から，彼はおそらくアルニムの影響で，自分の厳密な理論に添うことが出来ないことを見抜いたのだと，我々は結論するだろう。そして［初版以後の］テクストの相異から，彼が打ち切った発展が読み取れるだろう。」(48)すなわち，初版以後に専らヴィルヘルムが文学的に改訂したテクストが，ヤーコプの厳密な理論と反りが合わないので，ヤーコプは初版以後メルヘンの編集から手を引いたのだと，シュミットは言うのである。

ところで極めて興味深いことに，上述したヤーコプの言明に対するギンシェルの解釈は，シュミッ

トの解釈とまさに正反対である。すなわち，ギンシェルは上述した1963年の論文「ヤーコプ・グリムのメルヘン文体」において，上述したヤーコプの書簡の同じ箇所を動かぬ証拠として挙げて，次のように述べている。「ヤーコプ・グリムは，現代の民族学による収集が証明しているように全く達成出来るのみならず学問的にも必要である正確な再話の可能性を否定している。ヤーコプ・グリムは忠実さに二つの種類を区別している。すなわち，聞いた話を精密に再現する（あり得ない）『数学的』（“mathematisch”）な忠実さと，話の核心に手を付けない『正しい』（“recht”）即物的な忠実さの二つである。（中略）こうした公言はその兆しにおいて既に，ヴィルヘルムの手によって第二版以来（ないしは初版の第２巻以来）展開されたような改良され文体的に洗練された話の形式を是認することを含んでいる。」(49)

さらにギンシェルは1967年の書『若きヤーコプ・グリム 1805-1819』（“Der junge Jacob Grimm1805-1819”）の中で，「『逐語的な忠実さ』（“buchstäbische Treue”）と文字通りの再現を，ヤーコプ・グリムは KHM にもドイツ伝説集にも要求しなかった。それどころか，彼はそうした『数学的』（“mathematisch”）な，つまり現代の用語に翻訳すれば文献学的（philologisch）な忠実さを絶対に不可能だと説明している」(50)と述べている。

周知のごとく，ヤーコプは一般に文芸（Poesie）の形態学的（morphologisch）把握（形式と内容との間の不分離性）(51)を確信していたが，ギンシェルによれば，ヤーコプはメルヘンや伝説に対しては形式と内容との間，つまり言葉と思想との間の不分離的連関を決して擁護しなかった。何故ならば，「口頭による伝承は，その言い回しが ― 一度作られると ― 最終的に動かないような文学的刻印ではない」(52)からである。

したがって，「KHM の序文で称賛された話の『忠実さと真実性』（“Treue und Wahrheit”）は，本来的には素材の保存に，より正確に言えば，筋の運び（Handlungsführung）に及んでいるのであり，それよりずっと少ない程度において元々の話し方あるいは聞いた話の言い回しに及んでいるのである。グリム兄弟は言い回しを変更せずに純粋に再現したのではなく，彼らにとって相応しく思われるように改作して再現した。ヴィルヘルムは，伝承のある一定の固有性を維持しようとする尽力にも拘わらず，表現は大部分彼らから ― つまり大抵の場合は彼自身から ― 発していることを何ら隠し立てしなかった」(53)。

こうしたギンシェルの解釈からすれば，KHM 初版の序文で「兄弟が自分たちは何も変えたり改善したりしなかったし，自分たちのものは何も付け加えなかったと主張したとき，兄弟は明らかに意識して嘘をついていたのだ」というエリスの批判は見当違いも甚だしいことになる。

Ⅶ

ところで民話としてのメルヘンは，グリム兄弟にとって特に古代の神話（Mythologie）を伝承するものとして重要なのであるが，「神話はヤーコプにおいては，そこで芸術と学問とがリングのように相互に結び付いている結合体である」(54)。してみれば，メルヘン研究におけるヤーコプの立場は学問的

であると同時に芸術的なものである。ところが，ヤーコプが学問的立場のみを主張するならば，どのようにして神話としてのメルヘンの芸術的側面が権限を持ち得るのであろうか。ここからシュミットは，「彼［ヤーコプ］の理論からも実践からも明確な答えは取り出され得ない。（中略）［ヤーコプの］理論におけるある程度の不明瞭さは，言い繕われるべきものではなかろう」[55]として，ヤーコプのメルヘン理論における矛盾を指摘している。

反対に，上述したギンシェルの言うように，ヤーコプの「忠実さ」（“Treue”）の概念はここでは数学的＝文献学的（mathematisch-philologisch）な意味ではなく，強制されず，事柄に即し，自己の能力に対応した記述の意味であり，その意味でメルヘン把握に関してヤーコプとヴィルヘルムとは全く同じ見解だったと解釈すれば，メルヘンの有するこの学問的側面と芸術的側面という矛盾が解消することは明らかであろう。「気に入った表現へのあらゆる探求がその収集の忠実さを損なうのだという［ヤーコプの］主張はまだ，メルヘンの美的形態化（ästhetische Gestaltung）の目標を否定するものではない。」[56]

しかしながら，「即物的な忠実さと全体のトーンがどこまでも維持されている限りは，彼［ヤーコプ］には上述した変更は自明的なものと思われる。その究極的な根拠は，彼の形態学的なメルヘン把握にある」[57]とギンシェルは主張しているが，メルヘンを野の花に譬えるグリム兄弟のこの「形態学的メルヘン把握」に全く問題はないのであろうか。

形態学的（morphologisch）な見方は，個々の諸現象の発生的連関を，究極の単純な作用法則や形成力やエンテレケイア的原理の方向へと逆に辿るロマン主義に特有の有機体論的，植物化的な見方であるのに反して，解釈学的（hermeneutisch）見方においては，意味連関の複雑な構造は，発展の究極的な胚芽や展開法則を示唆するのではなく，計り知れない多様性を示唆するのであるが，その多様性はしかし最終的には作用連関の理解（Verstehen der Wirkungszusammenhänge）によって取り出される統一体となるのであり，この作用連関の構造統一は展開（Entfaltung）ではなく，異質なものの「結晶化」（“Zusammenschießen” des Heterogenen）として把握され得る[58]。

グリム兄弟は，メルヘンにおいては即物的な忠実さと全体のトーンがどこまでも維持されている限りは，形式（文体）を多少変えても内容は変わらないとするのであるが，シュミットが言うように「内容的な変更，追加及び拡大化は，文構造の詳細化や拡張と提携している。それは，モチーフの構成を文構造によって支える尽力なのである」[59]から，形式の変更と内容の変更とは循環的に相互連関している ―「解釈学的循環」（hermeneutischer Zirkel）―。したがって，KHM の美的形態化（ästhetische Gestaltung）は，原拠素材への恣意的な形式付与でもなく，必然的に行われる有機体的，形態学的発展でもなく，いわばこの両者の中間にあると言えよう[60]。

また，グリム兄弟（とりわけヴィルヘルム）は「根源への回帰」という19世紀前半当時のロマン主義思想に棹さして，古い民話ないし民衆メルヘンの原型を求めて絶えずテクストの改訂を続けたのであるが，どんなに古代へさかのぼってもメルヘンの原型は不可知であるという意味で，ここでもボルノウ（O.F.Bollnow）の言う認識における「アルキメデスの点の不可能性」[61]が当てはまる。したがって，KHM の文献学的研究においては，レレケも1986年の論文で指摘しているように，「我々がグリム

兄弟のテクストの諸層に一層より接近したいならば，従来のようにテクスト成立と仮説的原型の理論でもって始めてはならず，反対に（グリムの最終版の）最後のテクストでもって始めて，ここで一歩一歩摘出することを試みなければならない。— そうすれば，その周りにかくも多数の変更が為された核心を何程か剥き出し得ることが望める」[62]であろう。

さらにヴィルヘルムは，古い不正確な聞き書きテクストの再現を，改版ごとに次第に明瞭に「グリムのジャンル」（"Gattung Grimm"）[63]へと確立されるメルヘンの理想型に対応するように作り替えていったのであるが，その際に，聞き書きテクストと理想型とがいずれも単独では底本となり得ず，むしろ両者は相互に複雑に絡み合っているという「解釈学的循環」が理論的に問題となってくる。

以上のような点からしてKHMの意味連関の構造は，メルヘンの仮説的原型にさかのぼる形態学的見方ではなく，他の様々な類話を混交（Kontamination）させたりして改訂されたKHMの最終版のテクスト（表現）を解釈して「原著者よりもより良く理解する（besser-verstehen）」[64]解釈学的見方によって初めて正しく把握可能になると思われる。

Ⅷ

グリム兄弟にとって，口頭伝承の民話ないし民衆メルヘン（Volksmärchen）はその内容において古代の叙事詩（Epos）や神話や歴史が最も純粋に維持されているものであったが，この大人のための民話がどうして同時にまた子どものための童話ないし子どものメルヘン（Kindermärchen）として見なされるのであろうか。

民話の中に最も純粋かつ最も強力に維持されている古代の叙事詩は，ヤーコプによれば，民族の子ども時代に属している。したがってまた，子どもはメルヘンに対して最も敏感である。「こうしたメルヘンは，子どもと古代人の中にだけ住んでいる。何故ならば，第一に，子どもは叙事詩に対してのみ感受性を持っているからである。だから，こうした古文書［メルヘン］の維持は，子どもの心情のお陰である。第二に，誤った教育を受けた人たちはそれ［メルヘン］を軽蔑するからである。」[65]

こうした連関で，ヤーコプは「子どもの真理」（"Kinderwahrheit"）という言い回しをして，次のように述べている。「この真理［子どもの真理］は，しかし結局は古代人の真理なのだ。というのも，個々の人間の最初は民族の最初と同一線上にあるからである。」[66]つまり，個体発生は系統発生を短縮した形で反復するという生物発生原則（biogenetisches Grundgesetz）ないし反復説的なヤーコプの視点から見れば，民族と子どもとは分離されず，メルヘンの倫理的意味での純粋な「天真爛漫」（"Unschuld"）もこの点に基づいている。したがってヤーコプにとっては，生物発生原則の視点と倫理的視点の両方の意味において，民話（Volksmärchen）と童話（Kindermärchen）の間には何の相異も存在しないのである。それ故に「メルヘン集は僕としては子ども向けに書かれたものでは全然ないが，子どもたちには本当に望ましいものであり，それが僕には大変嬉しいことだ」[67]と，ヤーコプはアルニム宛の書簡の中で消極的にメルヘン集の教育的意味を認めている。

それに反してヴィルヘルムは，既に1812年11月19日付けのザヴィニー（F.K.v.Savigny）宛の書簡の

中で教育的視点を積極的に強調している。「我々の二つの書物［KHM 初版全２巻］について私はまたさらに，我々は子どものメルヘン集（Kindermärchen）においては全く本当にそれが教育の書（Erziehungsbuch）となって欲しいと望んでいる，ということより他に言うことはありません。というのも，子どもの諸力と本性にとってこれ以上に心の種になり（ernährend），天真爛漫で（unschuldig）爽やかな（erfrischend）ものを私は知らないからです。」[68]また，KHM 初版第２巻（1815年）の序文（1814年９月30日付け）においても，彼は同様に次のように述べている。「しかしながら，我々はこのメルヘン集によって，ただ単に文芸（Poesie）の歴史に寄与することだけを欲したのではない。メルヘンの中で生き生きとしている文芸自体が，文芸が喜びを与えることの出来る人に作用して喜びを与えるように，それ故にまた本来的な教育の書（Erziehungsbuch）がそこから生成するようにという意図も同時にあった。」[69]

さらに，1819年の KHM 第二版の付録の論文「メルヘンの本質」において彼は，「子どものメルヘン集（Kindermärchen）は，その純粋で穏やかな光の中で，心の最初の思想と力が目覚め成長するために物語られる。しかし，あらゆる人をその純朴な文芸（Poesie）が喜ばせ，またその真実が教えることが出来るので，またこのメルヘン集が家に残り遺産として伝えられるので，それはまた家庭のメルヘン集（Hausmärchen）とも名付けられる」[70]と述べている。したがって，ヴィルヘルムは彼のメルヘン集を，文芸書と同時に「本来的な教育の書」として編纂したのであって，ゾルムス（W.Solms）が指摘するように，「彼［ヴィルヘルム］は彼の物語形式を変更するに際して，常に道徳的意味内容（moralischer Gehalt）を規準とした」[71]のである。

このことは，19世紀前半のドイツの社会史からも理解される。すなわち，マニュファクチュアや工場による産業時代の開始によって職場と住宅とが分離した結果，婦人の働き場は当時成立した市民的小家族の中での純家庭的活動である3K ― Kinder（子ども），Küche（台所），Kirche（教会）― に制限され，それによって婦人に子どもの躾や教育への関心が生じて来たのである。「子ども期の発見，子ども部屋の最初の設立，子ども服と遊具の作製は，この時代に属している。同時に，知識を媒介すると共に道徳教育をも保証すべき児童文学への需要が生じて来る。この市場の空隙をグリム兄弟は KHM で埋めたのである。」[72]

以上において論じた解釈学的，教育学的視点がエリスのグリム批判には完全に欠落しているのであり，さらにはエリスのグリム批判に対してこれまで為された大方の反批判の盲点も，まさにこの点に存在すると思われる。

註

（１） Vgl. W.Solms, Die Moral von Grimms Märchen, Darmstadt 1999, S.1.

（２） J.M.Ellis, One Fairy Story too Many: The Brothers Grimm and Their Tales. Chicago／London: The University of Chicago Press 1983. X, 214p.

（３） J.M.Ellis, ibid., p.110.

(4) Cf. J.M.Ellis, ibid., pp.35-36.

(5) J.M.Ellis, ibid., p.110.

(6) J.Zipes, Mountains out of Mole Hills, a Fairy Tale, in: Children's Literature 13 (1985), p.215.

(7) H.Röllekes Besprechung über Ellis, John M.: One Fairy Story too Many, in: Fabula 25 (1984), S.330.

(8) S.S.Prawer, Myths and myth-machers, in: 342 TLS March 30 1984, Children's Books.

この文献の探索と入手に際してお世話になったヴッパータール大学のハインツ・レレケ (Heinz Rölleke) 教授と，オックスフォード大学のティナ・ダッフェレン＝ウェラー (Tina Duffelen-Weller) 女史にお礼申し上げる。

(9) H.-J.Uthers Besprechung über Ellis, John M.: One Fairy Story too Many, in: Zeitschrift für Volkskunde 81 (1985), S.308.

(10) J.M.Ellis, ibid., p.26.

(11) Cf. J.M.Ellis, ibid., pp.26f.

(12) H.Rölleke, a.a.O., S.332. — Vgl. K.Schulte Kemminghausen, Die niederdeutschen Märchen der Brüder Grimm, Münster 1932.

(13) 「メルヘンに関しては，(中略) 我々は尚あらゆるものを手に入れました。君は尚多くの新しいものを見出すでしょう。年老いた竜騎兵曹長から古着と交換して入手した若干の全く独特の兵隊ものは，君を楽しませることでしょう。」(Wilhelm an Arnim (26.9.1812), in: Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm. Bearbeitet von R.Steig (1904), Bern 1970, S.215.)

ちなみに，このクラウゼをグリム兄弟に紹介したのは，カッセルの近郊でクラウゼの住むホーフ村に分家があった友人のフォン・ダルヴィック男爵 (Friedrich von Dalwigk) を介した末弟の画家ルートヴィヒ・エーミール・グリム (Ludwig Emil Grimm) か，あるいは，KHM 初版第1巻 (1812年) の86話の1/4以上を提供し，その後この男爵と結婚してその結婚証明書 (1814年8月21日) がホーフの教会記録簿に記載されているマリー・ハッセンプフルーク (Marie Hassenpflug) であると推定される。Vgl. A.Schindehütte (Hrsg.), Krauses Grimm'sche Märchen. Revidierte und um eine Trouvaille erweiterte Neuauflage, Marburg 1991. — Ders. (Hrsg.), Die Grimm'schen Märchen der jungen Marie, Marburg 1991.

(14) ゲルマニストのゲデケ (K.Goedeke) の叔母が製紙工場でくず屋のシュテッフェン (Steffen) から聞いた話をゲデケが「ガラスの山のこと」("Vom gläsernen Berge") と題してグリムに送付したテクスト (in: Märchen aus dem Nachlaß der Brüder Grimm, hrsg. u. erläutert von H.Rölleke, 4.Aufl., Bonn 1989, S.54-59.) は，KHM に採用された口頭伝統の原拠素材が保存されている稀なものであり，ヴィルヘルムが「太鼓叩き」と改題して公刊した KHM 193と比べると，彼の改作の仕方が伺えて興味深い。

(15) Vgl. H.Rölleke, Die 'stockhessischen' Märchen der 'alten Marie'. Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm, in: Germanisch-Romanische Monatsschrift. N.F. 25

(1975), S.74-86.

この論文でレレケは，マリー旧説を粉砕して，KHM 初版第 1 巻への最大の提供者のマリーは老女マリーではなく，上述したハッセンプフルーク家の若きマリー嬢（Marie Hassenpflug）であることを初めて立証した。

(16) S.S.Prawer, ibid. このクラウゼの手紙のファクシミリが，上掲書 A.Schindehütte (Hrsg.), Krauses Grimm'sche Märchen, Marburg 1991.の118頁に掲載されている。

(17) ファクシミリ版として，Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder-Grimm-Museums Kassel mit sämtlichen handschriftlichen Korrekturen und Nachträgen der Brüder Grimm sowie einem Ergänzungsheft: Trankriptionen und Kommentare in Verbindung mit U.Marquardt von H.Rölleke. Göttingen 1986/1996. 参照。

(18) A.a.O., Bd.1 (1812), S.38.

(19) H.Rölleke, Neue Ergebnisse zu den "Kinder- und Hausmärchen" der Brüder Grimm, in: Jacob und Wilhelm Grimm: Vorträge u. Ansprachen in d. Veranst. d. Akad. d. Wiss. u. d. Georg-August-Univ. in Göttingen anlässl. d. 200.Wiederkehr ihrer Geburtstage am 24., 26. u. 28. Juni 1985 in d. Aula d. Georg-August-Univ. Göttingen. (Göttinger Universitätsreden; 76) Göttingen 1986, S.43.

(20) H.Rölleke, Von Menschen, denen wir Grimms Märchen verdanken, in: Brüder Grimm Gedenken, Sonderband 1987. Kasseler Vorträge, 1987, S.47-59.

(21) H.Rölleke, a.a.O., S.54.

(22) J.M.Ellis, ibid., p.70. — Vgl. W.A.Berendsohn, Grundformen volkstümlicher Erzählerkunst in den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Ein stilkritischer Versuch (Erg. Neudr. d. Ausg. 1921), Vaduz／Liechtenstein 1993.

(23) K.Schmidt, Die Entwicklung der Grimmschen Kinder- und Hausmärchen seit der Urhandschrift nebst einem kritischen Texte der in die Drucke übergangenen Stücke (1932), Vaduz／Liechtenstein 1986, S.81.

(24) H.Rölleke, Nachwort, in: Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. 3 Bde. Hrsg.v.H.Rölleke, Bd.3, Reclam,Ph. 1984, S.599.

(25) H.Röllekes Besprechung über Ellis, John M.: One Fairy Story too Many, a.a.O., S.331.

(26) Vgl. Grimms Märchen und ihre Quellen: Die literarischen Vorlagen der Grimmschen Märchen ／ synoptisch vorgestellt und kommentiert von Heinz Rölleke, Trier 1998, S.96f., S.108f., S.228f.

(27) H.Röllekes Besprechung über Ellis, a.a.O., S.331.

(28) J.Zipes, Mountains out of Mole Hills, a Fairy Tale, a.a.O., p.217.

(29) J.M.Ellis, ibid., p.71.

(30) KHM 初版第 1 巻（1812年）の著者保存本（註17を参照）の見返しの右ページに，ヴィルヘルムの自筆で「序文はヴィルヘルム，若干の補足はヤーコプ」という書き込みがある。

(31) Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder-Grimm-Museums Kassel, a.a.O., Bd.1 (1812), S. XVIII.

(32) Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. 3 Bde, a.a.O., Bd.1, S.21.

(33) J.Zipes, ibid., p.218.

(34) H.Rölleke, Grimms Märchen. Zur Ausgabe der "Kinder- und Hausmärchen" in der Diederichsschen Reihe 'Die Märchen der Weltliteratur', in: Wirkendes Wort, 1997, Heft 1, S.149.

(35) J.Zipes, The Brothers Grimm: From Enchanted Forests to the Modern World, New York & London 1988, pp.77ff.

(36) J.Zipes, Mountains out of Mole Hills, a Fairy Tale, ibid., p.219. — Vgl. H.Röllekes Besprechung über Ellis, a.a.O., S.332.

(37) J.Lefftz (Hrsg.), Märchen der Brüder Grimm. Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenberg im Elsaß, Carl Winters Universitätsbuchhandlung Heidelberg 1927. この貴重な文献の入手に際してお世話になったマールブルク大学図書館のモニカ・エーメ (Monika Oehme) 女史にお礼申し上げる。

— Vgl. Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812, hrsg. und erläutert von H.Rölleke, Cologny-Genève 1975.

(38) ドイツ語のタイトル＝KHM 租稿のタイトル，H＝Handschrift (KHM 租稿)，ローマ数字＝KHM の版数，《W》＝ヴィルヘルムの改作，《J》＝ヤーコプの改作（初版のみ）

(39) K.Schmidt, a.a.O., S.13.

(40) 現在では，6番は1808年のフランスの "Traditions et Usages de la Sologne" (par M. Legier, du Loiret, II, in: Mémoires de l'Académie Celtique, II, Paris 1808) の204-205頁からの翻訳，8番は1811年のグラント (Anne Grant of Laggan) 夫人の "Essays on the superstitions of the highlanders of Scotland" (London 1811, vol.1) の中のスコットランドの童謡または民謡 (285-286頁) の翻訳，12番は F.シュルツ (F.Schultz) の1790年の小説 "Kleine Romane" (Bd.5, Leipzig 1790) の269-288頁から取り上げたもの，40番はヤーコプがマリー・ハッセンプフルークの話をカッセルで書き取ったもの，57番はヴィルヘルムが1810年9月にマールブルクのメルヘンお婆さんから聞いた話をヤーコプが改作したものであることが判明している (Vgl. H.Rölleke, Nachweise, in: Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. 3 Bde, a.a.O., Bd.3, S.441-543.)。— 6番と8番の詳細については，Hermann Hamann, Die literarischen Vorlagen der Kinder- und Hausmärchen und ihre Bearbeitung durch die Brüder Grimm (Palaestra XLVII), Berlin 1906, S.19-24.参照。

(41) K.Schmidt, a.a.O., S.15.

(42) K.Schmidt, a.a.O., S.53.

(43) K.Schmidt, a.a.O., S.57.

(44) K.Schmidt, a.a.O., S.68.

(45) G.Ginschel, Der Märchenstil Jacob Grimms, in: Deutsches Jahrbuch für Volkskunde 9 (1963), S.131-168.

(46) "Ein Mährchen", in: Taschenbuch für Freunde altdeutscher Zeit und Kunst auf das Jahr 1816, Köln, S.321-331. 現在では, Grimms Märchen wie sie nicht im Buche stehen, hrsg.v. H.Rölleke, Insel Verlag Frankfurt am Main und Leipzig 1993, S.29-39.に所収。

(47) Jacob an Arnim (31.12.1812), in: Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm, a.a.O., S.255.

(48) K.Schmidt, a.a.O., S.20.

(49) G.Ginschel, a.a.O., S.164.

(50) G.Ginschel, Der junge Jacob Grimm 1805-1819 (1967), 2.Aufl., Berlin 1988, S.243.

(51) Vgl. Jacob an Savigny (20.Mai[1811]), in: Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Aus dem Savignyschen Nachlaß hrsg. in Verbindung mit I.Schnack von W.Schoof, Berlin · Bielefeld 1953, S.101f.

(52) G.Ginschel, a.a.O., S.266.

(53) G.Ginschel, Der Märchenstil Jacob Grimms, a.a.O., S.132f.

(54) K.Schmidt, a.a.O., S.17f.

(55) K.Schmidt, a.a.O., S.20.

(56) G.Ginschel, Der junge Jacob Grimm 1805-1819, a.a.O., S.247.

(57) G.Ginschel, a.a.O., S.266.

(58) 形態学と解釈学については, F.Rodi, Morphologie und Hermeneutik. Zur Methode von Diltheys Ästhetik, Stuttgart 1969. 参照。

(59) K.Schmidt, a.a.O., S.53.

(60) 形態化 (Gestaltung) については, O.F.Bollnow, Gestaltung als Aufgabe, in: Die Gestaltung. Kongreß-bericht des Ⅳ. Kongresses für Leibeserziehung, 4. bis 7. Oktober 1967 in Stuttgart, Schorndorf 1967, S.17-38. 参照。

(61) Vgl. O.F.Bollnow, Über die Unmöglichkeit eines archimedischen Punkts in der Erkenntnis, in: Archiv für die gesamte Psychologie 116 (1964), S.219-229.— Ders., Philosophie der Erkenntnis. Das Vorverständnis und die Erfahrung des Neuen, Stuttgart 1970.

(62) H.Rölleke, Neue Ergebnisse zu den "Kinder- und Hausmärchen" der Brüder Grimm, in: Jacob und Wilhelm Grimm: Vorträge u. Ansprachen in d. Veranst. d. Akad. d. Wiss. u. d. Georg-August-Univ. in Göttingen, a.a.O., S.47.

(63) 拙稿「『グリムのジャンル』(Gattung Grimm) の形成とその特質 — グリム童話集 (KHM) の美的教育学的次元 —」, 『九州大学大学院教育学研究紀要』創刊号 (通巻 第44集), 1998年, 243-264頁, 参照。

(64) 拙稿「解釈学における“Besser-Verstehen”の概念について — Bollnow／Gadammer 論争と Redeker／Kimmerle 論争を中心に —」,『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』第28集, 1982年, 1-9頁, 参照。

(65) Jacob an Arnim (28.1.1813), in: Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm, a.a.O., S.271.

(66) Jacob an Arnim (29.10.1812), in: a.a.O., S.236.

(67) Jacob an Arnim (28.1.1813), in: a.a.O., S.271.

(68) Wilhelm an Savigny (19.Nov.1812), in: Briefe der Brüder Grimm an Savigny. a.a.O., S.143.

(69) Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder-Grimm-Museums Kassel, a.a.O., Bd.2 (1815), S.Ⅷ.

(70) W.Grimm, Kleinere Schriften 1 (1881). Nach der Ausgabe von G.Hinrichs neu hrsg. von O.Ehrismann, Olms-Weidmann. Hildesheim・Zürich・New York 1992, S.333.

(71) W.Solms, Die Moral von Grimms Märchen, a.a.O., S.205.

(72) W.Solms, a.a.O., S.42.

ちなみに, グリム兄弟と同時代の教育家フレーベル (F.Fröbel) の遊戯理論や恩物 (Gaben) も, 当時の需要を満たすものとして考案された。「この需要と願望 — これらを満たさなければ多くの損害をもたらすのだが — に最も相応しく添うことが, 君もご承知のとおり, この数年来, 私にとって本当に専一の人生の課題なのです。」[1844年] (Fröbels Theorie des Spiels Ⅲ —Kleine pädagogische Texte 21 —, 4.Aufl., Weinheim 1967, S.18.)

岡 本 英 明

J.M.Ellis' Kritik an den Brüdern Grimm und ihre Problematik
— der hermeneutisch-pädagogische Aspekt der KHM-Forschung —

Hideakira Okamoto

Seit zwei Jahrzehnten hält das neue Interesse für Märchen, besonders "*Kinder- und Hausmärchen*" (KHM) der Brüder Grimm an, und zwar nicht nur in ihrem Heimatland Deutschland, sondern auch in den USA und Japan.

Gerade in dieser Zeit hat aber der amerikanische Germanist John M. Ellis in seinem sehr polemisch überzogenen Buch: "One Fairy Story too Many. The Brothers Grimm and Their Tales" (1983) vor allem in bezug auf die Überlieferungs- und Textproblemen der KHM seine heftige Kritik an Grimms geübt. Er gelangt zu dem Schluß, daß die Brüder Grimm ihre Leser bewußt über die Entstehung der Märchensammlung getäuscht hätten, so daß "surely, by now, we schould dispense with that added fairy tale with which they launched die collection—it is altogether one too many".

S.S.Prawer hat sich für dieses Buch begeistert und in TLS (The Times Literary Supplement) geäußert: "Let us, by all means, heed Professor Ellis's demonstrations of the Grimms' sleights of hand — no scholar, indeed, can afford to neglecht them." Sind aber nun Ellis' Studie und Prawers Urteil überhaupt richtig oder falsch?

In diesem Beitrag versuchen wir zuerst, auch drei Besprechungen H.Röllekes, J.Zipes' und H.-J.Uthers in Betracht ziehend, Ellis' Studie und die "Beweise", die von ihm ausgewählt wurden, ausführlich zu prüfen und damit seine Fehlleistungen klar ans Licht zu bringen.

Indem wir dann, in bezug auf die Streitfrage, nämlich die in der Vorrede der KHM gerühmte "Treue und Wahrheit" der Erzählung, ihre konträren Deutungen von K.Schmidt und von G.Ginschel aufdecken und die morphologische Auffassung des Märchens als den Grund dieses Widerspruchs herausarbeiten, beweisen wir in Hinsicht auf das richtige Verstehen der Struktur vom Sinnzusammenhang der KHM den Vorzug der hermeneutischen Auffassung des Märchens vor der morphologischen.

Und weiter dadurch, daß unsere Untersuchung die pädagogische Absicht und Charakteristik der KHM als "ein eigentliches Erziehungsbuch" (KHM. Erstaufgabe. Bd.2 <1815>, S.Ⅷ) hervorhebt, zeigen wir den fatalen Fehler der Studie Ellis'.